

俳句

大津俳句会

夕風の運びてきたるつづれさせ

井芹眞一郎

釣り糸が弧を描く空鰯雲

秋山 恵

積ん読の増ゆるばかりの夜長かな

佐賀 久子

遠くより訪ねし友の爽やかに

岡崎 浩子

貝拾ふ手もとを濡らす秋の潮

佐澤 俊子

父祖の田の畦に咲き継ぐ彼岸花

岩崎由美子

勇壮に勢子せまり来る秋祭

中林 好子

俳句

つのはな句会

秋深む付箋の数の減らぬまま

上杉 波

あの町に詐欺師と残暑顔を出す

矢嶋 道子

森青く馬駆けていく夏の夢

梅木トキエ

庭石に来て羽繕いの夏燕

塚本 洋子

星一つこぼして銀河沈黙す

柴田しのぶ

大西日終末時計また進む

村田 健二

入力に強張る指よ うすら寒

志賀 孝子

級友のまた一人逝く 星月夜

田上 公代

雑草のしぶとさ朱夏を独占す

木庭 杏子

短歌

大津短歌会

吾が歩み心許なし炎昼を蟻が蟻の屍引き
づりて行く

吉永 恵子

空蟬のブロック塀にしがみつく朝日を浴
びる苔むす壁に

鞍 岳志

友誘い友の得意なダンゴ汁時間は過ぎゆ
きページに残こす

管野 静

たのしみは歩行厳しき女の歩の三步自力
で歩み得しとき

坂本 果子

千羽鶴折りつつ願うも叶わずに逝きし少
女 非核を誓う

小平 善行

生かされて卒寿を迎えし喜びは竹馬の友
と分かち合いたし

豊岡ミツル